

二つの花菖蒲展示会で得たもの

会長 椎野 昌宏

今期（平成一九年）は二つの充実した展示会があり、創立七六年の長い歴史のなかでも記念すべき年となった。

一つは東京、上野の国立科学博物館で約三ヶ月にわたり開催された花展に

参加して、六月五日から一七日まで二週間花菖蒲を出展したことである。最

初この企画が当会顧問の岩科司先生から伝えられた時、六月の第一週に確実に

たくさんの花を開花させなければならぬこと（近年首都圏では第二週が

ピークとなる）、展示が地階で太陽の全く当たらない生きた植物にとつては

劣悪な環境で行われることの二点から躊躇せざるをえなかった。しかし花菖

蒲の早咲きに挑戦して成果を挙げている鳥取の山脇信正氏や、千葉でたくさ

んの花菖蒲をコレクションし栽培技術に定評のある橋本卓雄氏の積極発言も

あり、冒険的試みだが正式に参加を表明した。

歴史をさかのぼって、協会の創刊号に記載された昭和五年、六年の展示会の記録をここに紹介してみる。

☆第一回観賞大会

昭和五年七月十日より三十日迄

日比谷公園陳列会場並びに花壇入口に於て、出品鉢数七百、当年は熊本花菖蒲が始めて出品され、特別陳列をなした。その優秀な鉢作りに来園市民も驚愕した。

☆第二回観賞大会

昭和六年六月一日より七月五日迄。

日比谷公園陳列場並びに花壇入口に於て、出品鉢数老千株、約二百種が出品され回を重ねる毎に銘花の出品あり。

帝都各新聞紙上を初め市民は多大の賞賛を博した。

協会設立に参画された井下清、東京市公園課長（戦後一時期協会の会長を務める）は創刊号で次のように述べている。

「今や堀切、明治神宮内苑の花を二大名所として年々の日比谷公園の陳列会、熊本系鉢造秘伝の公開は花菖蒲百年の眼を破つて、古くして新しき此の世界的名花は時代の流行花たらんとする曙光を見出して居る」

来場した市民の数はわからないが、多分群集が集まり会場は熱気に包まれたことと想像する。残された白黒写真をよく見ると、宇宙、大淀、笑布袋など

の名札が読める。

長い時を隔てて同じ東京の中心部で

開催された今回の花展には会期全体で約一八万人が来場した。終盤の花菖蒲

展示中にも恐らく三万人は下らないひとびとが見てくれたものと思う。源氏

物語絵巻の人形とカキツバタをあしらった小袖を着た人形の展示にはさま

れた和のコーナーに設置された展示台のうえに、金屏風を背に飾られた花菖

蒲はひととき来観者を魅了し、あらためて日本の伝統園芸の存在を知った人が

が多かったと聞いている。年々歳々、世の中や人々の姿は変わつても、花は

変わらないという自然の摂理を展示会は示してくれた。

もう一つの展示会は例年開催されている鎌倉の大船フラワーセンターの展示会で、近年玉川大学の田淵俊人先生が園芸学のフィールドスタディーの一環として花菖蒲の観察のため多数の学生さんたちを展示会に派遣していただき、活況を呈しつつあることである。

この間の事情については会報第三四号（二〇〇六年）、第三五号（二〇〇七年）に先生と学生さんたちの投稿記事を参照されたい。学生さんたちは熱心に一花一花観察し、写真に収めたり、

記録をとったりしている。また株分けも実際にやってもらい園芸作業を実地に体験してもらっている。このような

試みを通して、こちら側で気付いたこととは若い人たちにはそれぞれの独自の美意識があり、好きな花についても、こちらがはつとするような品種名を挙げることもある。われわれが単に昔から有名であるとか、希少価値があるとかでかれらに良いものだと決め付けることはかえって、かれらの内心の反発を引き起こしてしまい花菖蒲をすんなり受け入れることにならない。どうしてもわれわれ趣味家は経験を積んだ老練としての自負があり、若い人たちとの意思の疎通にジエネレーションギャップが存在する。その意味でもできるかぎり多く若手の指導者が協会内でも育ってくれることが望まれる。然しながらいずれにせよ、田淵先生の熱心な指導によりたくさんの学生さんたちが花菖蒲を知り、日本の園芸文化遺産として認識してくれている。大船フラワーセンターの毎年の花菖蒲展示により若手が胎動しつつある。